

ブック・エッセイ

ポスト世俗化の時代

高橋一生

アレキサンドリア図書館顧問、元国際基督教大学教授

「信仰の現代中国 : 心のよりどころを求める人びとの暮らし」、イアン・ジョンソン、白水社、2022、秋元由紀訳

Ian Johnson, *The Souls of China: The Return of Religion after Mao*, Penguin, New York, 2018

19 世紀以来欧米で脱宗教の流れが強まり、その前提のもと、近代化イコール脱宗教、さらには“民族”も宗教、言語、身体的特徴および歴史観の 4 要素の一定の調和を持つ共同体 (H.アイザックス) という定義が広く受け入れられてきた。基本的にはその“民族”国家を目指す主権国家によって成り立つのが現代国際社会である。

脱宗教の先頭を切っていたのがマルクス主義であった。中国においては 1976 年の毛沢東の死以降宗教が復活した。その後、イスラム諸国において 1979 年のイランにおけるホメイニ革命によってイスラム過激派が勢いづき、1989-91 年のソ連の崩壊はロシア正教をはじめとした東方正教会の復活をもたらした。インドのモディ政権の“ヒンズー”・ナショナリズム、トルコのエルドアン政権のアタトゥルク以来の世俗主義を放棄した“イスラム”回帰、米国のトランプ政権の極端な“キリスト教福音派”志向など宗教回帰は多分に政治色を伴いながら猛威を振るいつつある。もはや宗教を抜きにして国際社会の分析は不可能になってきた。この大きな流れをユルゲン・ハーバーマスはポスト世俗化の時代と呼んでいる。

このポスト世俗化の先駆けをした中国の宗教に関して、10 数年中国に住んだり、調査旅行に行ったりして書き上げたのがピューリッツァー賞受賞者のカナダ人でベルリン在住の元ジャーナリストである中国研究者イアン・ジョンソンである。(ちなみに上記 H.アイザックスも初期に中国を対象に活躍したジャーナリズム出身の MIT 政治学教授である。) ジョンソンは 1982 年 3 月 31 日に共産党が採択した「我が国の社会主義時代の宗教問題に関する基本的観点と政策」、いわゆる「19 号文献」、がポスト毛沢東時代の宗教問題に関する出発点であると指摘している。この文献は共産党の長期的政策は「宗教的信仰の自由の尊重と保護」であると規定しているという。多様な統計資料を検

討したうえで、2010年代のジョンソンの見積もり（中国政府は宗教人口統計を認めない）では中国にはおよそ仏教徒と道教徒を合わせて2億人、プロテスタントが5千万人から6千万人、カトリックがおよそ1千万人、ムスリムが2千万人から2千5百万人がいると推計している。その中でプロテスタント人口が年7パーセントずつという顕著な増加傾向を示しているそうである。

ジョンソンは全30章を中国の人たちが重視する季節感を基本的枠組みとして二十四節季を春節から順にたどりつつストーリーを展開する。北京の仏教徒「金城」と彼の一家、山西省の道教徒「李」の一家、成都のプロテスタント「王」牧師と彼の仲間たちの3つの宗教生活にどっぷりと入り込んで、それぞれの内側から彼らを理解しようとしている。彼らが異なる問題に悪戦苦闘する姿に共感し、党と政府を突き放す視点で、中国社会のドラマを描いている。

これら3つのストーリーの共通項は革命で分断された中国社会における癒しの模索である。「毛沢東全集」第1巻の書き出しは「誰が我々の敵か？誰が我々の友か？これは革命の一番重要な問題である」となっている。繰り返しこのテーゼが中国社会を覆い、そのたびに相互不信が増幅されてきた。21世紀になり、それなりに豊かになっても、人間関係を一皮むくと分断・不安・怒りがあらわな社会が形成されてしまっている。

金城一家の住む北京から西に65キロほどにある妙峰山で年一度行われる祭りにおける廟・香会を通して中国風の仏教の展開が描かれている。道教に関しては葬儀と占いという庶民生活の部分と高額な講習料（1週間5千ドル！）を取る学習の世界、また身体的修行への参加、という多面的世界が描かれている。

最も印象的なのは成都の王牧師の活躍である。この元人権派弁護士は独学で牧師になった大変有能な指導者であり、一種のポップ・スターである。北京から十分遠いのでかなり自由度の高い成都という土地柄を生かして、非公式な（プロテスタント教会のほぼ半数が家庭や地域集会所などを拠点とし、政府からは認められていない集会での）教会活動を展開している。教会員は加速度的に増加し、神学校を設立し、慈善団体を創設し、社会に大きなインパクトをもたらしている。彼は、もっとも力があるのは究極的には政府から自由な普通の人である、という強い信念を持っている。共産党の監視役が集会に参加していても、意図的にそれを許容して、自由かつ深みのある大変魅力的な説教をし、多くの人たちを引き付けている。

しかし「訳者あとがき」によると、王牧師は2018年12月奥さんとともに逮捕され、教会も閉鎖されたと報道されたそうである。半年後に解放され、2019年12月に9年

の禁固刑を宣告された。

2016年10月に党中央から大学、研究機関、マスコミなどに対していわゆる「7つのタブー」という指令が出され、人権・民主主義・自由・市民社会などに言及することに大きな制限が加えられた。言論の自由の幅は加速度的に狭まりつつある。さらに、「訳者あとがき」によると、ジョンソンの当該書籍も中国では発禁処分になった。最近では、2023年5月23日の日経新聞夕刊によると中国当局は2023年5月23日、中国で活動が認められているイスラム教、カトリック、プロテスタントの各団体の宗教指導者について、インターネットで氏名や顔写真、宗派などの情報を登録、管理する制度をはじめたそうである。

「19号文献」がありながらも中国共産党は「宗教」という表現に常に警戒をしめし、国民もそれを十分承知している様子が本書によく表れている。「信仰」という表現だと儒教や民族的風習（民俗宗教）を含み、共産党としてはある程度安心する様子も描かれている。従って「文化」という表現を党も政府も好み、ユネスコの「無形文化遺産」という考え方を奨励し2010年代には1200ほどの団体が政府によって無形文化遺産と認定されたそうである。道教の「李」家は2010年に同家の「芸」を後世に伝えるために15万元(2023年6月交換レートで約300万円)の一時金を与えられた。

また、党は公認の5宗教（仏教、道教、プロテスタント、カトリック、イスラム教）には中国化を勧めている。海外からの送金に関してはプロテスタントやカトリックの人たちが特に神経質になっている様子がよく描かれている。とりわけ米国中国系の人たちを中心とするプロテスタントの一部に対する党と政府の警戒が厳しいそうである。

最近では、カトリックと中国政府の関係はあたかも西欧中世社会が再現されたがごとく状況になっている。司祭叙任権闘争である。カトリックからすると世界のカトリック人口より中国の人口の方が多く、その多くの人たちが心の渇きを覚えている状況が明白であり、今後の布教重点地域である。長い交渉の末、ローマ教皇庁と中国政府両者の合意に基づき司祭の叙任権が行使される、という協定が締結された、と数年前に報道された。ところがそのほぼ半年後には新たな司祭を中国政府が一方的に任命したことに私は啞然とした記憶がある。

国家宗教事務局の局長というデリケートな運用が必要なポストに葉小文が1995年に45歳という比較的若くして任命され、14年間にわたって力を振るった、とジョンソンは述べている。彼は1970年代に大学で社会学を専攻し、党でも有能ぶりを発揮していたようで、江沢民主席の若い盟友とみなされていた。チベット族の仏教とインドに亡命

中のダライ・ラマとの関係、また回族というマイノリティーの問題には硬軟取り混ぜた対応をした。最近の新疆ウイグル自治区の問題はおそらく、有能なバランス感覚を持った責任者を欠いた北京の状況があったことも一因であるのかもしれない。

さらに、歴史的に国家指導者は「天命」によってその地位が与えられているという中国人共通の認識があることも中国において宗教に大きく、かつデリケートな位置づけが与えられている理由であろう。歴代、王朝が崩壊してきた一つの大きな要因は新たな宗教の勃興であった。この点に共産党政権も極度に神経質になっている。1999年に法輪功の掃蕩対策がとられたのも、これが主な要因であった。清王朝がアヘン戦争に続いて19世紀半ばにキリスト教系の太平天国の乱が起こったことによって完全に屋台骨が崩壊したことは、現在の中国指導層の共通認識になっている。

他方、1億人近い仏教人口を抱えた中国にとって、世界仏教フォーラムの常設都市であるウーシー（無錫）市が世界の仏教の中心であるというキャンペーンを展開しつつある点をジョンソンは描いている。国際的であっても、中心が中国であればいいということであろう。

ジョンソンの観察によると、プロテスタントとカトリック、およびイスラムに関しては党と政府の締め付けが厳しくなりつつある。一方、仏教と道教に関してはどちらかといえば支援体制が見られるようである。しかし、締め付けが厳しくなれば逆に活動が活発になるのが宗教である、ということを歴史が雄弁に物語っていることを中国指導部はよく認識しているようでもあることが、ジョンソンの本からはうかがえる。単に幅を広くとり「文化」を強調し、その一部である「宗教」に対して一定の社会的位置づけを与えるという、これまでの対応がかなり厳しく問われはじめるのは時間の問題のように思える。

彼はこの400ページ強の著書を中国古典の一番の中心である「書経」からの引用で終わらせている。「天命」の内容は何よりもまず「民の声」であるという、中国の人たちが肝に据えているところである。

「天は我が民の見るとおりに見る
天は我が民の聞くとおりに聞く」